

図書館で働きたい人へ

森實 彩乃*

近年、安価な労働力として学生を雇うアルバイトとは一線を画し、学生と職員が協働して図書館を運営する学生協働という取り組みが注目され、多くの大学図書館で実施されている。筆者も大学在学中に学生協働を経験した一人だ。その時に得た経験から大学図書館員という仕事に興味を持ち、母校の大学図書館に就職して今年で3年目になる。本稿では、学生時代の実体験を振り返りながら、学生協働の意義と課題について考察するとともに、図書館員になるための最近の勉強法や、図書館員として実際に働いてみて感じたこと、図書館員の将来について思うことを述べる。

キーワード：山口大学図書館、学生協働、大学図書館員、経験談、勉強法

1. はじめに

近年、大学図書館では学生協働が活発に行われている。かくいう私も学生協働経験者の一人であり、在学中の4年間、山口大学総合図書館で学生協働に参加した。卒業後、母校の大学図書館に就職し、今年で3年目になる。本稿では、私の実体験を振り返りながら、学生協働の意義と課題について考察するとともに、図書館員になるための最近の勉強法や、図書館員として実際に働いてみて感じたこと、そして、図書館員の将来について思うことを述べる。なお、本稿でいう図書館員とは、大学図書館員を指す。

2. 学生協働とは

まず、国内の学生協働の概要と、山口大学図書館の学生協働について紹介したい。

2.1 国内の学生協働の概要

学生協働という取り組みが注目される以前から、予算や人員削減のあおりを受け、学生を安価な労働力として雇い、図書館業務の一部を任せてきた大学図書館は多い。しかし、現在活発になっている学生協働は、学生を単なるアルバイトとみなすのではなく、図書館運営に利用者目線を取り入れるための重要なパートナー、あるいは、ピアサポートにより学習支援を行うための貴重な人材とみなしている点が特徴だ。また、学生協働の目的として、学生自身の成長や、キャリア形成支援を掲げているところも多く、給与以外の面で学生にメリットをもたらすことを目指している点も学生協働の特徴の一つと言える。

学生協働の活動は年々広がりを見せており、『学生と図書館の協働事例まとめ』¹⁾によると、2012年5月時点で73事

例、2012年11月時点で84件の事例が確認されている。

なお、一口に学生協働と言っても、その活動形態はさまざままで、活動に対して給与を支払う例もあれば、ボランティアで無償の例もある。また、金銭的な報酬だけでなく、岩手大学の図書館サポーターズ“とさぼ”のように単位を与えたり、白百合女子大学の図書館ピアサポーターLiLiAのように、活動する毎に付与されるポイントを50ポイント溜めると、図書カードがもらえる²⁾事例もある。

活動内容もさまざまだ。『学生協働マップ』³⁾によると、活動内容をおおまかに4種類に分類することができる。表1にまとめた。

表1 活動内容による学生協働の分類

分類	活動内容	2012年5月 時点の事例数	2012年11月 時点の事例数
①図書館業務サポート	配架・館内案内・カウンター業務・ICT機器サポート・図書館広報など	29件	30件
②学生選書	選書ツアー・POP作成など	16件	16件
③学習支援	学習相談・レポート作成支援など	12件	28件
④学生サークルその他	学生団体が図書館内で活動するものや他に当てはまらない内容など	16件	10件

八木澤は上記の分類について、「4つの分類による事例分けは、直感的な事例探しがしやすいが、一方で問題点として、各活動内容に必ずしも適切な分類ができているとはいえないという点がある。一大学内における活動が複数の分類にわたる場合にも、一つの活動内容の下に分類されている場合がある」と指摘している⁴⁾。確かに、山口大学図書館学生協働は①の図書館業務サポートに分類されているが、選書も行っているため、分類①②の両方にあてはまる。学生協働マップの分類は便宜的なものだということに留意

* もりざね あやの 国立大学法人山口大学情報環境部学術情報課工学情報係
〒755-8611 宇部市常盤台2丁目16番1号
Tel. 0836-85-9035 (原稿受領 2014.4.7)

されたい。

2.2 山口大学図書館の学生協働

2.2.1 目的

山口大学における学生協働の取り組みは、「山口大学憲章」⁶⁾及び「明日の山口大学ビジョン」⁶⁾で謳われている学生・教職員による「“共同”・“共育”」という理念を具体化するために始まった⁷⁾。図書館に興味を持つ学生と教職員が協働し、図書館のサービス向上、学習環境改善、学生による学生に対するピアサポート、及び学生のキャリア形成支援を目的としている。

2.2.2 総合図書館学生協働

・メンバー数

総合図書館学生協働には、現在 38 名の学生が在籍し、さまざまな活動を行っている。平成 18 年度に 10 名でスタートし、平成 21 年度に 30 名を超えてからは、35 名前後のメンバー数で推移している。詳細は表 2 を参照されたい。

メンバー数が 40 名を超えると職員に過重な負担がかかり、活動を確実に管理・把握し学生をきめ細やかに指導していくことが困難になるので、山口大学総合図書館としては現状のメンバー数が適切だと判断している。

表 2 メンバー数の推移

年度	メンバー数
平成 18 年度	10 名
平成 19 年度	19 名
平成 20 年度	21 名
平成 21 年度	32 名
平成 22 年度	40 名
平成 23 年度	38 名
平成 24 年度	37 名
平成 25 年度	38 名

・運用体制

係や職位を越えた学生協働 WG を編成して、多くの職員が学生協働について協議し、その意義や活動方針に関して館内全体で共通認識を持ち、学生に対してより質の高いサポートやアドバイスを行う体制をとっている。

私も学生協働 WG のメンバーであり、学生にとって最も身近な職員となって、あらゆる活動に関する窓口となること、そして、活動内容を学生協働 WG に報告、相談し、その結果を学生の活動にフィードバックする役目を担っている。

金銭的な報酬については、責任ある仕事に対する対価として予算内で給与を支払っている。しかし、新メンバー募集の際に、学生協働はアルバイトとは違うため、給与を目的とせず自分自身の成長を目的としてほしいこと、また、受け身にならず積極的に活動してほしいことなどを説明

し、学生協働の趣旨を理解してもらった上でそれでも参加したいという学生のみ採用している。

・活動内容

学生協働の活動内容について表 3 にまとめた。なお、学生協働のリアルタイムの活動はブログで随時紹介している。

詳細はブログを参照のこと。

<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/blog/>

表 3 山口大学総合図書館学生協働の活動内容

分類	内容	備考
図書館業務サポート	配架整理、カウンター業務、新着図書 of 装備、蔵書点検・資料の移動作業・新入生オリエンテーション・ガイダンス・オープンキャンパス補助	主に職員から業務を提案、指示することが多い。
学習環境改善	新着図書コーナーの移動、椅子等の備品の選定	職員から意見を求めることもあれば、学生協働メンバーから提案があることもある。
学生主体の WG	キャリア教育・就職活動支援コーナー（以下就活コーナー）WG、資料の修復 WG、図書の企画展示 WG	学生協働メンバーが主体となって企画・実施している。
学生協働交流シンポジウムの開催 ⁸⁾	島根大学、島根県立大学及び梅光学院大学と共催で、学生協働交流シンポジウムを毎年開催している。同じような活動を行っている他大学と交流を持ち、活動をさらに活発化させるのが目的だ ⁹⁾ 。	学生協働メンバーが主体となって準備を進める点に特徴がある。平成 26 年度は山口大学が会場なので準備を進めているところだ。
ML 連携展示 ⁹⁾	山口県大学 ML (ミュージアム・ライブラリー) 連携事業が行う ML 連携展示 ⁹⁾ に総合図書館と埋蔵文化財資料館が参加し、職員と学生が協力して展示を行っている。	学生協働 WG の職員だけでなく、WG 以外の職員も学生協働メンバーと協力しながら展示の準備を行っている。

2.2.3 医学部図書館学生協働

医学部図書館でも、学生と職員が協働して、図書館の利用促進やサービス向上及び環境改善に取り組んでいる。現在約 5 名の学生が学生協働に参加しており、カウンター業務やガイダンス支援などを行っている。これ以外にも、学生の発案で、これまであまり利用されていなかった学習用 DVD 教材の活用増進を目指し、DVD を試聴できる端末を設置したり、展示方法を工夫したりして、利用者から好評を得ている。

総合図書館と医学部図書館はキャンパスが別の市にあることもあり、職員側の運用体制は異なるが、お互いに交流を持ち、情報交換をしながら活動にあたっている。

3. 学生協働の意義と課題

次に、私の学生協働経験を振り返りながら、学生協働の意義と課題について考察する。

3.1 私の学生協働経験

3.1.1 最初の失敗

そもそも私が山口大学に入学を決めたのは、人文学部の司書課程で図書館司書の資格を取得することができるからだった。幼いころから本が好きで、将来働くのなら図書館がいいと漠然と夢見ていた。無事山口大学に入学し、ほっとしたのもつかの間、「図書館員になるのは難しいと聞き、図書館司書の資格を取っただけでは、図書館で働くことはできないのではないかと」という不安に襲われ、入学早々学生支援課の就職支援室に相談に行った。そこで総合図書館の学生協働を紹介してもらい、学生協働に参加することになった。

最初に経験したのは、配架整理だった。ここで最初の失敗を経験する。一般的に、図書を配架整理する場合、分類番号順、著者記号の順に並べる。しかし、その時の私は何を思ったのか、著者記号順で並べたあと、分類番号順で並べてしまったのだ。自分の失敗を知った時の恥ずかしさ、自分が滅茶苦茶にしてしまった図書の並びを先輩が黙って直してくれたことを知ったときの申し訳なさは今でも昨日のここのようによく覚えている。このとき、分からないことはきちんと確認することや、早めに相談、報告することが大切なのだと知った。しかし、正直に告白すると、学生協働に在籍した4年間では、確認、相談、報告を怠り、同様の失敗を何度も繰り返してしまった。だが、何度失敗しても見放さずに指導し続けてくれた当時の職員のおかげで、確認、相談、報告の大切さを骨身にしみて学び、卒業するころにはそれがある程度身に着いたように思う。配架を滅茶苦茶にした自分が今では学生に配架整理の仕方を教えているのだから、我ながら感慨深い。そして、私以上に当時の職員はいろいろな意味で感慨深いと思っているのではないだろうか。

3.1.2 成功体験

大失敗から始まった私の学生協働経験だが、成功体験もあるので、いくつか紹介したい。

一つ目は、就活コーナーの設置だ。就活コーナーは、人生や生き方について学び人間形成を促すとともに、就業観や勤労観を養うための図書を集めたコーナーである。それまでの図書館には、そういったコーナーがなかった。私が就職支援室で相談したときに学生協働を紹介してもらったのと同じように、学生の進路の悩みにヒントを与えることのできる場所が図書館にもあるといいのではないかと思います。就職支援室に多くのご協力をいただきながら完成した。当初は館内の関連図書を集めただけだったが、今では学生協働メンバーが選書した図書を数多く配架している。書店で実際に図書を見て選書を行うブックハンティングも実施

している。なお、就活コーナーには相談員等による人的サポートはないので、就職支援室を紹介し、そちらに相談に行くように案内している。また、就活コーナーには試験や面接対策の図書は配架しない。そういった問題集やマニュアル類は、就職支援室で購入し貸し出している。まだ就活に危機感がなく、就職支援室を訪れる機会の少ない1・2年生も図書館には比較的よく訪れるということで、就活コーナーには彼らの興味を引くような図書を配架し、早期から学生のキャリア形成支援を行うというのも就活コーナーの目的だ。

これは職員になってから知ったことだが、就活コーナーの設置は、部局を超えた当時の教職員の協力があってこそ成功した企画だった。様々な面での強力なバックアップがあったからこそ、企画から設置までスムーズに進み、現在の就活コーナーが生まれた。就活コーナーの設置は、学生の発案をもとに図書館と他部局が協力して実施したという点で画期的な出来事であり、その後の学生協働の活動が広がるきっかけとなった。

二つ目は、図書の企画展示だ。1ヶ月を目安に一つのテーマで館内の図書を展示し、利用者に効果的に紹介することを目的に始めた。利用者の目を引くために、本紹介の手書きのポップやレイアウトに工夫を凝らした。第1回目はクリスマス展示を行い、多くの利用者に好評を得た。

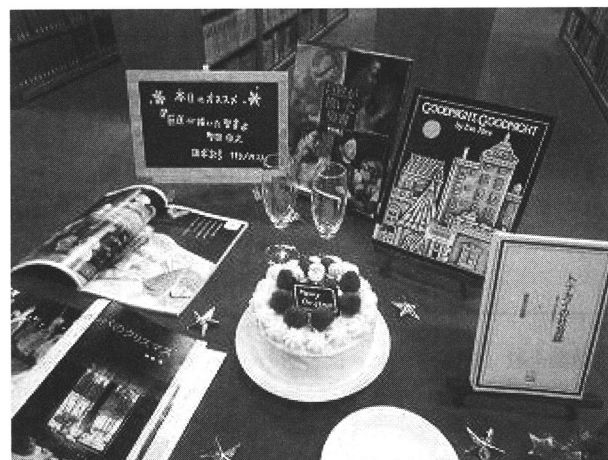


写真1 第1回目のクリスマス展示

他にも、資料の修理技術を共有・向上するための講習会を開いたり、学生協働のイメージキャラクターを作ったりと、さまざまな企画を実行した。中には英会話勉強会など不発に終わった企画もあるが、資料修理の講習会や図書の展示は今も後輩が引きついで活動を行っている。こうした数々の失敗と成功を繰り返しながら、課題発見解決能力やコミュニケーション能力、企画力、実行力といった力を身に付け、報告、連絡、相談を確実に行うという社会人として大切なことを学ぶことができた。また、活動を通して図書館業務に関する知識と経験も得ることができた。

以上のように学生協働メンバーとして活動するうちに、大学図書館で働きたい、という思いが芽生え、この思いは

しだいに強くなっていった。大学2年生のとき、公共図書館で春休みの間アルバイトも経験したが、やはり大学図書館で働きたいという思いは変わらなかった。

3.2 学生協働の意義

私の実体験をもとに、学生協働の意義について表4にまとめた。なお、それぞれの活動内容に対して、学生時代の自分にとっての意義と、職員になってから感じる図書館にとっての意義に分けて記載している。

表4 学生協働の意義

活動内容	学生にとっての意義	図書館にとっての意義
①カウンター業務	図書館に関する知識や文献検索のスキルが向上する。聞く力をはじめとするコミュニケーション能力が向上する。	ピアサポートにより、より良い学習支援を行うことができる。
②学生発案による各種企画	課題発見・解決能力やコミュニケーション能力、企画力、実行力といった社会人に必要な力を身につけることができる。	職員の説明能力やコミュニケーション能力、調整技術が鍛えられる。学習環境改善やサービス向上につながる。
③職員との協働	多様な働き方や価値観に触れ、就業観や勤労観を学ぶことができる。	自身の価値観や就業観及び勤労観を見つめ直すことができる。
④活動全般	多くの人と協力しながら、課題を発見、解決策を立案し、必要なものを考え準備し、全員で成長しながら課題を解決していくという、あらゆる仕事において重要なプロセスを経験できる。	学生の活動をサポートする中で職員もともに成長することができる。学生の成長を実感し、業務に対してモチベーションが上がる。
⑤活動全般（特に図書館業務に関わる部分）	インターンシップのように、図書館の仕事を経験し、仕事内容を詳しく知ることができる。	図書館員を目指す学生に図書館業務を経験させることで、キャリア形成支援を行うことができる。

3.3 学生協働の課題

学生協働に取り組むことは、図書館にとっても利点が多く、意義のあることだ。しかし、一方で課題も指摘されている。八木澤は、「学生協働には問題点もある。学生スタッフの活動を図書館側が管理・把握するのに労力が必要なこと、有償であれば財源を確保しなければならないこと、学生スタッフのモチベーションをあげる・維持する必要があることなどが挙げられる。特にモチベーションの維持や継続性を課題として挙げているところが、活動の報告やアンケートの回答からも読み取れる。学生協働を通して学生スタッフと直接関わる図書館職員は、これらの問題に対処する力が求められる」と指摘している¹⁰⁾。

指摘のとおり、学生協働には、運用に際して図書館員に

かかる負担や財源の確保など、さまざまな課題がある。学生協働メンバーと直接関わる機会の多い私にとって、最も身近な課題は学生のモチベーション維持や継続性だ。学生のモチベーションが低いと、上述した学生協働の意義も薄くなる。たとえば、①のカウンター業務はより良い利用者対応をしようという向上心がなければ単純作業に陥るし、②の学生企画による各種企画はモチベーションが低いとそもそも企画が上がってこない。ラーニングコモンズでの人的サポートについても、学生のモチベーションが高ければサポートのためのアイデアも豊富に出てきて、研修も上手く行き、質の高いサポートができるが、モチベーションが低いと実現すら危うい。よって、学生のモチベーション維持は学生協働の存続に関わり、その意義を高めるために重要なポイントだ。学生のモチベーションを維持するため、学生と接するとき心がけていることが三つある。

一つ目は、学生がやりがいを感じられるようにすることだ。例えば、学生と何か作業をするとき、ただ手順を説明するのではなく、なぜそのような仕事をするのか説明し、図書館運営に自分たちが必要な存在だと感じられるようにしている。また、一人一人をよく観察し、成長が見られたときは褒めるようにしている。

二つ目は、学生協働と自分自身に自信を持ってもらうことだ。学生一人一人の性格や、得意なこと、興味のあることを見極め、彼らのアイデアを引き出し、それが実現できるようにフォローしている。アイデアが実現していけば、学生は学生協働と自分自身に自信を持つようになり、その自信が次の活動に繋がってくる。

三つ目は、学生一人一人の将来に対する悩みや不安と向き合うことだ。具体的に言うと、折に触れて学生と話をし、ときには懇親会など開いて、またあるときには、一対一で話す機会を設けて、就職に関する悩みや進路の相談などを受けている。私自身、図書館で働きたいという希望を持って入学し、学生協働の活動に参加していたが、自分は図書館員に向いているのかという懸念を抱き、他の職業に魅力を感じた時期もあった。そんな不安や迷いを職員に相談すると、的確なアドバイスをもらい、自分の気持ちを整理することができた。結果、将来に対して前向きになり、活動に対してのモチベーションも上がった。そうした自分自身の経験から、図書館員が学生の進路相談を受けることによって、学生のモチベーションが上がると考えている。また、図書館員が学生の進路の相談を受けることにより、学生協働の目的の一つであるキャリア形成支援にも繋がると確信している。

また、学生のモチベーション維持も大切だが、職員側のモチベーションも同じくらい大切だ。モチベーションを維持するには、自分たち職員にはない学生ならではの発想を楽しみ、学生とともに成長していけることを喜ぶ気持ちが必要だ。そのためには、なるべく多くの職員で幅広く学生協働のサポートを行い、方向性や課題、そして何より学生の成長と図書館の変化という成果を共有することが必要だと思う。財源や運用体制など、学生協働にはさまざまな課

題があるが、職員側のモチベーションを維持し続けることができれば、そういった課題解決の糸口を見つけることができるのではないだろうか。

4. 図書館員になるための最近の勉強法

ここでは図書館員になるための最近の勉強法について紹介する。なお、一口に図書館員といっても、大学によって採用の方法や試験内容は異なっている。表5に簡単にまとめたので参照されたい。ここですべての勉強法を紹介することはできないので、以下に国立大学法人等大学職員採用試験を受験した際の私の勉強法を紹介する。

表5 採用方法や試験内容

	国立 大学法人	高等 専門学校	公立大学 図書館	私立大学 図書館
試験内容	①国立大学法人等大学職員採用試験（一次試験） 120分 40問 内訳：一般知識20問（社会7問，人文7問，自然6問），一般知能20問（文章理解7問，判断推理8問，数的推理及び資料解釈5問） ②専門試験（二次試験） ③面接 ※事務系職員と図書系職員で採用枠は異なるが，①は事務系職員と同様の内容。②は図書館に関する内容。		各大学・各法人が個別に実施する (書類選考と面接を実施するところが多い)	
備考	上記の試験以外に選考採用も徐々に増えている。		※図書系の採用は少なく，事務系職員として採用された職員が図書館の配属になるケースが多い。	

私が本格的に試験対策を始めたのは、3年生の春頃からだった。一次試験対策は、山口大学生協同組合の公務員講座を受講した。各専門分野の講師による授業を受講し、公務員講座特製のテキストや問題集で勉強した。新卒の場合は、独学の人も少なからずいるが、私のように在学中に大学生協同組合や企業が提供する公務員講座を受講し、試験勉強を行うことが多い。二次試験対策は、司書課程の授業で使用した教科書を中心に勉強した。なお、二次試験の過去問題はHPで閲覧できるので参考にしてほしい。

参考

URL<http://opac.lib.hiroshima-u.ac.jp/portal/examine/>

また、学生協働の仲間から他の図書館の試験問題を提供してもらい、それを参考に勉強したりもした。

私の実体験では、二次試験の勉強も大切だが、一次試験の勉強を早い段階から始めることをお勧めする。なぜなら、一次試験は表のとおり幅広い分野から出題されるので、合格ラインと言われている6~7割の正解率を越えるには相応の時間がかかるからだ。特に、一般知能の20問は問題内容にある程度の傾向があり、対策が立てやすいので、一般知能を得点源にできれば一次試験突破の可能性が高まる。とはいえ、傾向を把握するのは一朝一夕にはいかない。計画的に勉強して試験に臨んでもらいたい。

また、大学図書館員になるためには、図書館に関する知識や試験対策も大切だが、図書館で学生に質の高い学習支援を行うためにも、学生時代に自分の専門分野をしっかりと学んで、研究・論文執筆の経験を積んでほしいと思う。

現在、大学教育においては、平成24年8月の中央教育審議会の答申¹¹⁾で述べられているように、学士課程教育の能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要とされており、平成25年8月の「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」¹²⁾において、アクティブ・ラーニングを支援する場としてラーニングコモンズが挙げられ、その適切な設置場所として図書館が指名されている。さらには、「学生による主体的学習の効果を高めるためには、ラーニングコモンズにおいて、空間等の環境整備に加えて、大学院生、図書館員や教員等による学生を支援する体制の構築が不可欠である。学生同士が支援し合うピアチュータリングも、質保証を図りつつ促進することが望ましい」¹³⁾とされている。

また、平成22年12月の科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」¹⁴⁾によると、「学問の多様性が高くなる中で、大学図書館が教育研究支援に積極的に関わっていくためには、大学図書館職員には各大学等において行われる教育研究の専門分野、即ちサブジェクトに関する知識も求められ」とされている。

ピアチュータリングによって学習支援を行うときに、図書館員自身が、より良いレポートや論文を書くためには何が必要なのか、どのように書けばいいのか知っている必要がある。また、大学時代に何かひとつでも専門的に学んでいれば、図書館員になってからその知識を活かすことができる。よって、図書館で学生に質の高い学習支援を行うためにも、学生時代に自分の専門分野をしっかりと学んで、研究・論文執筆の経験を積んでほしいと思う。

5. 実際に働いてみて感じたこと

思い返せば、在学時代、大学図書館で働きたいという気持ちがある一方で、自分は図書館員の資質があるのだろうか、他に向いている仕事があるのではないかと、といった迷いがあった。そのため、県庁にインターンシップに行ったり、市役所に職場訪問をしたり、就活コーナーの本を読み漁ったり、図書館員や学生協働の仲間に相談したりした。その結果、迷いはあるものの、自分が今一番面白いと感じる場所に就職しようと考え、私は大学図書館を選んだ。学生協働という取り組みの面白さや、学生や教職員や地域の方といった、さまざまな年齢、立場、専門性を持った人が利用者として訪れ、その中で働ける楽しさに魅かれた。また、私が国立大学法人の中でも山口大学図書館を志望した理由は、4年間を過ごした山口県に愛着があったから、そして、できれば母校で働いて職員としても学生協働に関わってみたいからだった。日々の活動の中で、より良い図書館を目指して妥協せず、仕事に真摯に向き合う図書館員の姿勢に触れ、自分もそういう仕事がしたいという思

いもあった。

実際に働いてみて、自分に図書館員の資質があるかどうかはまだ分からない。少しは向いているところもあるだろうし、逆に向いていないところもあると思う。しかし、完璧な人間はいないのだから、資質の如何に関わらず、これからより良い図書館員になれるように努力をしていきたいと思う。また、職員として学生協働に関わってみると、学生時代には知らなかった苦労があつてくじけそうになるときもあるが、後輩の頑張りや成長を目の当たりにすると、自分も頑張らなければと励まされるし、日々彼らに多くのことを教えてもらっていると思う。何より、実際に働いてみると、目標に対して妥協せず、仕事に真摯に向き合うということはかなりの体力と熱意が必要だと知った。日々の業務に追われ、妥協してしまいそうになるときもあるが、利用者でもあり後輩でもある学生協働のメンバーと交流すると、もう少し頑張ってみようという気持ちになれる。職員になってから、職員にとっての学生協働の意義はそういうところにもあるのだと初めて知った。

6. 図書館員の将来について思うこと

この数年で、電子ジャーナルや電子書籍といった電子リソースが急速に普及し、2013年には紙の資料が全くない図書館が米国テキサス州南部ベア郡の大都市サンアントニオに誕生し話題になった。電子リソース普及の流れを見て、将来的には紙の資料は出版されなくなり、すべて電子化されると予想する人もいれば、紙の資料がなくなることはないと考えてる人もいる。もし、将来的に紙の資料が出版されなくなったとしても、すでに紙で出版された資料を保存あるいは電子化し提供していくため、図書館の資料の収集・保存という従来の機能は必要とされるだろう。しかし、今後、学士課程教育の能動的学修への転換に伴い、図書館の従来の機能に加えて、図書館員には情報リテラシー教育、あるいは、レポート作成や学習相談などの学習支援がより一層求められる。図書館員はこれまでの図書館のイメージにとらわれずに、それらの要望に柔軟に対応していく必要があると思う。また、大学に所属する図書館なので、大学の今後の方針や、その中で図書館が果たすことのできる役割を把握し、その達成のために何ができるか考えることも必要だと思う。

これからの図書館員という仕事は大変だ。働く前から知識として知ってはいたことだが、働き出して実感した。何か一つのことを修めればそれでいいというものではなく、時代が変わり大学が変わる中で、次から次へと新しい知識や考え方を吸収していかなければならない。そのために、最近チェックしたのは、『ビッグデータの覇者たち』『サラリーマンの教科書』など。前者は、ビッグデータを図書館サービスに活かす可能性を知るために、後者は、仕事に対する姿勢を学ぶために選んだ。図書館員としての勉強はもちろん、社会人として知っておくべく一般的な知識や考え方を吸収し成長できそうな図書をチェックしている。また、ネットによる情報収集も欠かせない。カレントアウエ

アネス・ポータルで最近注目の話題をチェックするのはもちろん、ブログや Facebook での情報収集を行っている。研修への参加も重要だ。そこで学ぶことはもちろん、出会った人から刺激を受けたり、そこで形成する人脈が自分を成長させてくれる。平成 25 年 7 月の大学図書館問題研究会福岡支部が開催した「ハードコア・ノンユーザーの心をつかむ図書館ブランディング」に参加したが、他の図書館が利用者呼び込むために行っている取り組みを学び、知識や経験が豊富でスキルアップやサービス改善に意欲的な他大学の図書館員と交流を持ったことは、非常に刺激的で、勉強になった。そのうちの数人とは、その後も連絡を取り合い、情報交換をしている。

図書館員という仕事は大変だと思う一方で、図書館員という仕事は面白いとも思う。確かにさまざまな知識や能力を要求されるので、決して簡単な仕事ではないし、私がすべてのレベルを満たしているとは到底言えないが、望まれるレベルが高いからこそ、やりがいを持って仕事に打ち込むことができるのだと思う。実は、私は在学時代、図書館学ではなく、フランス文学を専攻としていた。私の周囲には、同じように国文学やドイツ文学といった、図書館学以外を大学時代に専攻に学んでいて、仕事を始めてから本格的に図書館の知識を得ていくタイプの職員が割合的に多い。異なる得意な分野を持つ職員が集まって仕事するのは楽しい。レファレンスでも特定の分野の問い合わせが来たら得意な人が答えるようにしている。図書館に関する知識の習得はもちろんのこと、それ以外の専門性を深めながら図書館員として成長していけるところも、図書館員という仕事の面白さだと思う。

7. おわりに

以上、私の実体験を振り返りながら、学生協働の意義と課題について考察するとともに、図書館員になるための最近の勉強法や、図書館員として実際に働いてみて感じたこと、図書館員の将来について思うことを述べた。社会人としても図書館員としても 3 年目の半人前ではあるが、本稿が図書館員を目指す人にとって少しでも参考になれば幸いである。

注・参考文献

(web 参照日は全て、2014 年 2 月 24 日です)

- 1) ふじたまさえ. “学生と図書館の協働事例まとめ”.
<http://archive.mag2.com/0001260410/20121126142822000.html>
- 2) 白百合女子大学図書館 “図書館ポイントカード LiLiCa”
<http://www.shirayuri.ac.jp/lib/lilica/index.html>
- 3) 学生協働マップ
<http://dl.dropboxusercontent.com/u/15665405/map/index.html>
- 4) 八木澤ちひろ. 大学図書館における学生協働について：学生協働まっぶの事例から. カレントアウェアネス. 2013, no316.
<http://current.ndl.go.jp/ca1795>
- 5) 山口大学. “山口大学憲章”
<http://www.yamaguchi-u.ac.jp/info/18.html>
- 6) 山口大学. “明日の山口大学ビジョン”
http://www.yamaguchi-u.ac.jp/info/university_vision.html

- 7) 日高友江ほか, 学生協働 (Library Assistant) によって変わる図書館サービス: 山口大学図書館の実践. 大学図書館研究. 2009, vol87, p.9-14.
<http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/yunoca/handle/2010010160>
- 8) 第3回 大学図書館学生協働交流シンポジウム「私たちの手でつくり出す図書館の形 ～人を惹きつける空間を目指して～」 <http://www.lib.yamaguchi-u.ac.jp/LA/sympo2013/>
- 9) 平成25年度山口県大学 ML (ミュージアム・ライブラリー) 連携特別展 展示テーマ『再生』
<http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/>
- 10) 八木澤ちひろ, 前掲
- 11) 文部科学省中央教育審議会. 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて: 生涯学び続け, 主体的に考える力を育成する大学へ (答申) 平成24年8月28日
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- 12) 文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会学術情報委員会. 学修環境充実のための学術情報基盤の整備について (審議まとめ) 平成25年8月21日
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/08/1338778.htm
- 13) 同上
- 14) 科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会学術情報基盤作業部会. 大学図書館の整備について (審議のまとめ) 平成22年12月
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1301602.htm

Special feature: Hints of Librarians. You Want to be a Librarian?. Ayano MORIZANE (Yamaguchi University Library, 16-1 Tokiwadai 2-chome, Ube-shi, Yamaguchi)

Abstract: In recent years, many university libraries use students as library assistants. I was also one who worked as library assistants in university. Interested in the job of university librarians from that experience, this is my third year working at Yamaguchi University Library. In this paper, I take a look at my experience of school days, as well as discuss the challenges and significance of student collaboration. Then I state the study method to become a librarian and what I feel to be actually working as a librarian and what I think of future of librarians.

Keywords: Yamaguchi University Library / library assistants / university librarian / story of my personal / the study method